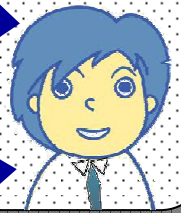




ねっどわーく



H24. 05. 25 No.13

■ヒドゥン・カリキュラムの原理

～生徒指導で最も大切な教師の言行一致。ゆれのない指導で信頼関係を結ぶ原理～

校長先生がよくお話しされるヒドゥン・カリキュラムについて。ヒドゥン・カリキュラムとは教育哲学の概念のひとつで、「教師が意識しないままに教え続けている知識・文化・規範」と定義されています。具体的には、以下のような例が挙げられるでしょう。

◆A例「授業中」

発言を求めて、ある子を指名。

だんまりが続くので、T「どんな小さなことでもいいから、気づいたこと、言ってみて。」しかし

C「……。」

T「そうか、じゃあ…、〇〇さんはどう？」

かけられても、黙っていれば次の子に回してもらえという暗黙のルールが成立

◆B例「休み時間・放課後」

学級開きにおいて、T「先生は、いじめはゆるさない。どんな小さなことでもいいから、何かあったら、いつでも話して。」しばらくして

C「先生、実は…」とある子が話をしたが、タイミング悪く？会議の時間の前・・・

T「ごめん、会議なんだ。あとでね。」

先生はいつもって言ったのに、後回しにされた…嘘をつかれた…もう話すもんか…

どちらもよくある光景ですし、自分も反省。。。(-_-) では、これを回避するには、どうしたらよいのでしょうか。答えは「踏ん張る」です。つまり、自分の言行には責任を持つしかないのです。A例では、とにかく「待つ」しかないでしょう。指導計画が狂うのは覚悟の上。腹をくくる。「何かを求められたら、現時点で考えられることは話さなければならぬんだ。」ということ、姿勢として子どもたちに体得させていく。

B例では、①抜けられそうな会議ならば、子どもを優先させる（怒られるかな（笑） ②会議であることを理解してもらい、なるべく早い時間に、話を聞く時間をとるか、話したい内容を紙に書いてもらう などでしょうか。とにかく、教師の言行を一致させていくように、特に苦しいときこそ踏ん張ることが大事なのでしょうね。

上記2例は、ヒドゥン・カリキュラムの悪しき面をあげました。しかしながら、悪いことばかりではないのです。仮に上記2例とも、子どもたちに納得いくようにさせることができれば、確実に信頼を得るでしょう。多少子どもたちに無理を言ったとしても、先生についてくるでしょう。正規のカリキュラムも大事とは思いますが、実はこうしたヒドゥン・カリキュラムを大事にすることが、学級経営において鍵だと私は思います(^^)



～参考文献「生徒指導10の原理・100の原則」堀裕嗣著 学事出版～

◆昨日、天三中の阿部教頭先生・研究主任の三浦先生と、来年度の「東北特活発表」に向けての話し合いを持ちました。確かに発表はあるのですが、それよりも、小中連携の9年間で子どもを育てるという観点を大事にしたいものです。だって、長岡の子が進学するんですから。で、天三中の研究概要をいただきました。

別紙にて添付しましたので、ぜひ、お知りおきください。(^^)